

用言の活用形とアクセント

木部, 暢子
純真女子短大講師

<https://doi.org/10.15017/10495>

出版情報 : 文献探究. 12, pp.1-10, 1983-07-20. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

用言の活用形とアクセント

木部 暢子

1. はじめに

本稿は、現代東京方言のアクセントを資料として、用言の活用形のアクセントとそれに接続する付属語のアクセントを、形態音韻論的に解釈したものである。資料は主に、秋永一枝^③による。またアクセントの解釈は、おおむね服部四郎^④によった。

2.

用言の活用形は、単語の認定の問題とからんで議論の多い所である。用言が活用するという点では諸説異同はないが、それではどの語形を活用形と認めるか、という問題になると、議論百出してくる。

橋本進吉博士は、「語の活用といふのは、同じ語が種々の違った形をとることであって、活用というのは「単に語の外形のみに関するものではない」く「文がそこで終止することをあらはし」たり、「一寸中止して、之と同等の資格の語に続くことを示し」たり、「『ない』『う』『せる』などの語を附ける場合に用ゐる」たり、「意味のきれつぎを示し、又種々の語に続く為、同じ語の形の変化するの」をいうと述べている^(⑤)。そして口語用言の活用形を

- (一) 打消の「ない」に続く形 — 未然形(第一)
- (二) 打消の「ん」に続く形 — 未然形(第二)
- (三) 受身の「れる」「られる」使役の「せる」「させる」に続く形 — 未然形(第三)
- (四) 中止法の形 — 連用形
- (五) 文を終止する形 — 終止形・連体形
- (六) 「ば」に続く形 — 仮定形
- (七) 未来の「う」「よう」に続く形 — 未然形(第四)
- (八) 命令の意味を以て終止する形 — 命令形
- (九) 「て」に続く形 — (—)

のように整理している。また博士は、助動詞に関しては独立性が乏しいことを一応は認めているものの、やはり助動詞を一品詞として^(⑥ P233)、

です、だ〔指定〕 やうだ〔比況〕 らしい〔推量〕 せる、させる〔使役〕
 れる、られる〔受身其他〕 ない、ぬ〔打消〕 う、よう、まい〔推量〕 ます〔敬語〕
 た〔過去〕 さうだ〔様態〕 たい〔希望〕 (まい)〔推量〕 さうだ〔伝聞〕

を口語助動詞としてあげている^(⑥ P153)。

山田孝雄博士は、「用言が事物の説明を有するには種々のしかたがある。さうしてその用ゐ方の違いによって語形の変化を起す。この語形変化をば活用又は『はたらき』といふのである」と述べて、口語の用言の活用形に「未然形、連用形、終止形、条件形、命令形」の五の形式を立てる。そして助動詞という品詞を廃し、

れる、られる、せる、させる、ぬ、ない、う(未然形附属) て、た、たい(連用形附属)
 (ば)う、まい、らしい(終止形附属)

を用言の複語尾とし、

だ、です

を存在詞とした(㊤ PP60, PP88)。

時枝博士は、「動詞の活用形の場合は、常に特定の陳述、例へば、推量とか打消、或は連用修飾的陳述、連体修飾的陳述等に応ずるところの語形変化で、しかもそれがすべての動詞を通じて法則的に行はれるところに特色がある」と言い、活用形を「未然形、連用形、終止形、連体形、仮定形、命令形」の六つに分けた。橋本博士の助動詞に対しては、言語過程説の立場から、れる、られる(受身、可能、自発或は自然可能、敬讓)す、せる、させる(使役)は、「詞の中の用言に属する接尾語」として取り扱ひ、

だ(指定)、ない、ぬ、まい(打消) た(過去及び完了) う、よう、だらう、らしい、べし(意志及び推量) ます、です、でございます、ございます(敬讓指定)、ません、ではありません、ありません(敬讓打消) でせう(敬讓推量)

については助動詞としている。また、山田博士の存在詞「ある」を指定の助動詞とする(㊤)。

渡辺実氏は、構文論の立場から「活用とは、単語が同語異形を有することであり、「活用形とは、同語異形のそれぞれであるが、「活用形は陳述または再展叙をも託される形態であって、その条件を満足しない形態は、活用形とは認められず、その点で従来の考え方は大きくくい違ふ結果を招くであろう」と述べている。渡辺氏によれば、「読まない」「読んだ」の下線部はその部分に「陳述または再展叙が託されているとはどうしても認められない」から、「活用形の名に値しないものと認定される。この結果、用言の活用形は、

連体形、連用形、誘導形、接統形、並列形、独立形、陳述形

の七つに整理される。また橋本博士の助動詞については、

せる(させる) れる(られる) たい そうだ ない た う(よう) まい【乙種助動詞】

は複雑な用言を派生する接尾語という形で解消され、

だ らしい だらう【甲種助動詞】

は「判定詞」として用言の一つに位置づけられた形で解消する(㊤ P350 ~ P408)。

服部四郎氏は、用言の活用形に当たるものを語形変化と呼び、「“yomu”“yomi”“yome”“yoma-”という断片に該当する形式」は、「[jom|u, jom|i, jom|e, jom|a(-)]と切って発話することは全然ないから、yomu, yomi …… など全体がそれぞれ単語或いは単語の一部であり、「これらの諸形式は、形と意味との共通な部分を含む点でも互いに無関係でないばかりでなく、或種の文の或一定の位置にはそのうちのいずれかのみが現れ他は現れ得ないことが少なくない点でも、これらはまとめて一つの群をなす。〈中略〉このような場合に yomu, yomi, yome, yoma- はお互いに他の『変化形式』であるという。そして、『この単語(たとえば yomu)は形が変化する』或いは『この単語は語形変化がある』という表現を用いても差支えない」と述べている。また「或形式の变化形式が自立語だから、その形式も単語であるとすることは危険である。たとえば、日本語の yomu, yome が自立語だから yoma- は自由形式だと直ちにやるわけには行かない」とも述べている。服部氏の説から用言の活用及び助動詞に当る部分を拾いあげると、

yomu, yomi, yome

は自立形式で自立語であり、

yoma-, yon-, yome-(ba)

は附属形式である。従ってこれに続く -nai, -te, -de, -ba も附属形式とされる。また、

(3)

自立形式に付くものでも、*yomumai*, *yomuna* (禁止), *yomimasu*, *yomitai* などの *-mai*, *-na*, *-masu*, *-tai* などは同一職能の、1種類の自立語のみにつくから、附属形式とされる。また、*honda*, *yomunoda* …… の *da*, あるいは *rasi*, *nasai*, *nagara* などには附属語となる(㊸)。服部氏の説によると、橋本博士の助動詞の多くは附属形式であるから単語以下のものとなり、動詞の未然形、音便形(一般活用、サ変、カ変の「て、た」に続く形を含む)、仮定形も単語以下のものとなる。服部氏はアクセントも積極的に取り入れておられるが、後に述べるようにアクセントの異なる /*jōmi*/ と /*jōmi*/ とを別扱いせずに、後者を前者の結合語形であるとして同じ自立形式に属させている点、アクセントは二次的な要素としか考えておられないようである。

阪倉篤義氏は、奥村三雄氏の「そのアクセント形式がその語の語性職能を反映している」(㊸)という説を評価して、活用形の説明に積極的にアクセントを取り入れておられるが、結論としては時枝博士に近いものとなっている(㊸)。

以上が主な文法説であるが、アクセントの方に重きをおいた研究に、古代語では金田一春彦(㊸)、奥村三雄(㊸)の研究があり、現代語では秋永一枝(㊸㊸)、都竹通年雄(㊸)、早田輝洋(㊸㊸)などに詳しい記述がある。アクセントを文法との関係でとらえたものに、秋永一枝(㊸)、奥村三雄(㊸)、日下部文夫(㊸)などがある。

3.

ところで、アクセント研究の上でどうしても避けることのできない問題がある。それは、アクセントは単語について定まっているのか、文節について定まっているのかという問題である。この論争についてはここに詳しく説明する必要もないだろうが、現在でも様々な議論を呼んでいる。特に活用形のアクセントや付属語のアクセントを考える上では、この問題をはっきりさせておかなければ自家撞着に陥ってしまう恐れがある。

有坂春世博士は「文節アクセントの型(顕在型)と単語アクセントの型(潜在型)とは、全然その性質を異にするものであり、「アクセントの型を論ずる者は、潜在型の問題と顕在型の問題とを厳密に区別しなければならない」として、「文節アクセントの型は Phonem に相当し、単語アクセントの型は Morphonem に相当するものである」と述べている(㊸ P44)。

$\overline{\text{ハナ}}$ (鼻), $\overline{\text{ハナ}}$ (花), $\overline{\text{ハナガ}}$ (鼻が), $\overline{\text{ハナガ}}$ (花が), $\overline{\text{ハナ}}$ (鼻の), $\overline{\text{ハナ}}$ (花の)を体系的に記述するのであれば、「アクセント単位」(柴田武(㊸㊸))なるものを設けて整理した方がよいだろう。しかし「鼻」と「花」のアクセントは、単独では同じ型なのに、「が」が付いた時になぜ違いが生ずるのか、「の」が付いた時にはなぜ違いが生じないのかは、これでは説明ができない。それを説明するためには、単語のアクセント(潜在型)にアクセントの単位をとらなければならぬ。従来、「鼻」と「花」のアクセントがそれぞれ /*hana*/, /*hana*/ と解釈されてきたのも、Morphonem の立場に立つ解釈であった。

私は奥村三雄氏と同じく「そのアクセント形式がその語の語性職能を反映している」(㊸)という考えに従いたい。そのためには形態論の立場に立つのが便利であるから、以下、「アクセントは単語について定まっている」という考えで論を進めていく。

アクセントは単語について定まっていると言っても次の問題として、それならば単語であれば全て同一種類のアクセントを持つのか、という事がある。服部四郎氏は、自立語にはアクセント素を認め、付属語には副次アクセント素を認めた(㊸)。これに対して川上薫氏は、二拍

以上の助詞に関しては副次アクセント素を考える必要はなく、ただ一拍助詞については副次アクセント素という思想が必要だとする(④)。上野善道氏は、自立語と助詞とで「アクセント素として本質的な差があるわけではな」として、副次アクセント素を認めない(⑤)。私は上野氏の言われるように、自立語と付属語のアクセント上の違いは、本質的な差ではなくて程度の差にすぎないと思う。従って上野氏の考えに従いたいが、東京方言の「しか」のような助詞については考えを異にする。上野氏は語頭の核は東京方言には認めないので、「しか」はアクセント素を持たないとするが、私は助詞に関してのみ、語頭に核を持つものを認めてよいと思う。この点では川上氏の考えに従う(川上⑥)。

以上、本稿の立場をまとめると、

- (1) アクセントは単語について定まっている。
- (2) 付属語は自立語と同じくアクセントを持つ。
- (3) 付属語に関してのみ、語頭に核を持つアクセントを認める。

4.

アクセントは単語について定まっていると言っても、実際の発話では必ずしも単語が単位とはならない。動詞・形容詞の場合には、それが様々な活用形となって現れる。そこで、単語のアクセントを実際の発話に結びつける規則がいくつか必要である。現代東京方言について

規則Ⅰ 用言は活用してもアクセント核の有無に変化が起こることはない。

という規則を立てる。これは言うまでもなく、佐久間鼎博士の平板式、起伏式概念を言いかえたにすぎない。佐久間博士は「用言の種々の活用形において、その基本型(筆者注、普通に文の終止にあたって用いるもの)のアクセントの式、すなわち平板式および起伏式の特徴は保存される傾向を示す」(⑩ P484)と述べている。これを言い替えたのが規則Ⅰである。次に

規則Ⅱ 一つの「句」にはアクセント核が一つだけあるか、またはアクセント核がないかのどちらかである。

規則Ⅲ 一つの「句」の中にアクセント核を持つ単語が二つ以上あれば、最初のアクセント核が生き、それ以下のアクセント核は消える。

という二つの規則を作る。「句」とは川上泰氏の言う「全体が一続きに云われて切れ目が無いという感じを与える」「一つの音調的単位」のことで、ある場合には文節に相当し、ある場合には単語に相当し、ある場合には連文節に相当し、またある場合には一つの単語の中に「区切り」がおかれることもあるというものである(「準アクセントについて」)。しかし内容は多少異なる。川上氏は「アメがフル」[シ「ロイハナ」ガ]のように一つの「句」の中に二つ以上アクセント核のあるものを考えておられるが、上の規則Ⅱ、規則Ⅲは、このような場合には後の核が消えるという解釈に基づいている。

5.

規則Ⅰ～規則Ⅲに従って、現代東京方言の用言の活用形のアクセントとそれに続く付属語のアクセントを見ていくことにする。随時、付表を参照されたい。

まず、所謂未然形は、無核動詞 / naka-, iwaraiwa-, ki-, narabe- / (/...o- /)、有核動詞 / jōma-, jojōga-, de-, yoki- / (/...o- /) と考えられる。(3)のヨ^ナナイ、オ^ヨガナイ、デ^ナナイ、オ^キナイの核を動詞未然形末尾の核と見るか、ナイの語頭の核と見るかは

(5)

難しいが、未然形(1).(2)と歩調を合わせると別々に「……〇/」を認めるよりも、未然形は「フ」に統一した方がよいだろう。

次に、連用形には二種類のアクセントがある。(4).(5).(6).(7)のように、無核動詞 /naki-, ōwarai-, ki-, narabe- / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjomi-, ōjōji-, de-, ōki- / (/ …… 〇 /) となるものと、(8).(9)のように、無核動詞 /naki, ōwarai, ki, narabe / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjomi, ōjōji, de, ōki / (/ …… 〇 /) となるものの二種類である。前者を連用形1とし、後者を連用形2とする。有核動詞 /de^{ru}/ の連用形2では、 /^{de}/ とおなじに /de^r/ となっているが、東京方言では自立語の場合、語頭に核があることを許さないで、核が一拍分後にずれたものと解釈する。(9)では、(3)のナイと同じように、ナキワ(シナイ)、ワライワ、キワ、ナラベワの核を動詞末尾の核と見るか、ワの語頭の核と見るかの問題があるが、(3)と同じ理由で wa の核と考える。

終止・連体形にはやはり二種類ある。終止・連体形1は、無核動詞 /naku-, ōwara'u-, kiru-, naraberu- / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjomu-, ōjōju-, deru-, ōkiru- / (/ …… 〇 /) であり、連用形2は、無核動詞 /naku, ōwara'u, kiru, naraberu / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjomu, ōjōju, de^{ru}, ōki^{ru} / (/ …… 〇 /) である。(17).(18)のナクカ、ワラウカ…等の核は先と同様、動詞末尾の核とは考えない(此様な考えに対しては、馬瀬良雄^⑩に反論がある)。

仮定形は、無核動詞 /nake-, ōwara'e-, kire-, narabere- / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjome-, ōjōje-, de^{re}-, ōki^{re}- / (/ …… 〇 /) である。

命令形は、無核動詞 /nake, ōwara'e, kiro, narabero / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjome, ōjōje, de^{ro}, ōki^{ro} / (/ …… 〇 /)、最後に音便形は、無核動詞 /na i-, ōwarā-, ki-, narabe- / (/ …… 〇 /)、有核動詞 / ōjōⁿ-, ōjōⁱ-, de^r-, ōkiⁱ- / (/ …… 〇 /) となる。

形容詞の活用形を次に見ていこう。連用形にはやはり二種類がある。連用形1は、無核形容詞 /akaku, cumeta^{ku} / (/ …… 〇^{ku} /)、有核形容詞 /si^{roku}, mizi^{kaku} / (/ …… 〇^{ku} /)、連用形2は、無核形容詞 /akaku, cumetaku / (/ …… ku /)、有核形容詞 /si^{roku}, mizi^{kaku} / (/ …… 〇^{ku} /) である。

終止・連体形にも二種類あって、終止・連体形1は、無核形容詞 /akai-, cumetai- / (/ …… i- /)、有核形容詞 /siroi-, mizikai- / (/ …… i- /)、終止・連体形2は、無核形容詞 /akai, cumetai / (/ …… i /)、有核形容詞 /siroi, mizikai / (/ …… 〇ⁱ /) である。

仮定形は、無核形容詞 /akakere-, cumeta^{kere}- / (/ …… 〇^{kere}- /)、有核動詞 /si^{rokere}-, mizi^{kakere}- / (/ …… 〇^{kere}- /) である。

音便形は、無核形容詞 /akaka^Q-, cumeta^{kaka}Q / (/ …… 〇^{kaka}Q- /)、無核形容詞 /si^{roka}Q-, mizi^{kaka}Q- / (/ …… 〇^{kaka}Q- /) である。

有核形容詞のうち拍数の多いものは、新しくは無核形容詞と同じアクセントにならてきている。

以上をまとめると、次頁のようになる。動詞では、未然形、連用形1、終止・連体形1が規則Iに該当していない。これらはいずれも、有核の動詞が無核になっている。このようなものは、ある動詞の異形態＝活用形と呼ぶことはできず、非独立の要素である。服部氏の言われるように、「附属形式」と呼ぶべき^⑫ものである。ただし、連用形1に関しては服部氏と多少意見がくい違う。服部^⑫では、アクセントよりも語の接続に重点が置かれていて、

	無核動詞	有核動詞	無核形容詞	有核形容詞
未然形	/-----o-/	/-----oo-/	-----	-----
連用形1	/-----o-/	/-----oo-/	/-----ōku/	/-----ōoku/
連用形2	/-----o/	/-----ōo/	/-----ku/	/-----ōoku/
終止・連体形1	/-----o-/	/-----oo-/	/-----i-/	/-----i-/
終止・連体形2	/-----o/	/-----ōo/	/-----i/	/-----ōi/
仮定形	/-----o-/	/-----ōo-/	/-----ōkere-/	/-----ōōkere-/
命令形	/-----o/	/-----ōo/	-----	-----
音便形	/-----o-/	/-----ōo-/	/-----ōkaQ-/	/-----ōōkaQ-/

benkyō nasai, goran nasai, sō nasai, oyomi nasai, yomi nasai, kowagowa nagara, iyaiya nagara, yomi nagara, ōmendō nagara, sō itte oki nagara, komatte i nagara

などの nasai, nagara はいろいろな自立語に接続するから附属語と見、これの接続する、yomi は /jōmi/ の結合語形で自立語であるとする。しかし、果して kowagowa nagara の nagara と yomi nagara の nagara は同一だろうか。服部氏は次に、wāre nagara, sikasi nagara, kodomo nagara, ciisai nagara も同じ nagara としあけておられるが、果してそうだろうか。nasai にしても、yomi nasai の nasai と同等なのは、benkyō nasai ではなくて、benkyō sinasai の nasai なのではないか。服部氏の言われる「職能や語形変化の異なる色々の自立語につくものは自立形式である」という原則も、じつはたいへん主観的にならざるを得ない部分があるのである。

私は、附属語か附属形式かの区別には、アクセントが有効であると思う。まず動詞の連用形に附属形式の連用形1 (/jōmi-/) と自立形式の連用形2 (/jōmi/) とを区別して、連用形1につく -masu, -tai, -nasai, -nagara は全て附属形式と考える。そう言えば、nagara が他の語につく場合にも、/wāre/—/wārenagara/, /sikasi/—/sikasinagara/ のようにアクセントが変わっているが、この /wāre/ に対する /wāre-/、/sikasi/ に対する /sikasi-/ も、単なる結合語形と言うよりも附属形式とした方がよいと思う。自立形式の連用形2につくものは、附属語だと考えられる。

終止・連体形も同じく、附属形式の終止・連体形1と自立形式の終止・連体形2とを区別し、終止・連体形1につく -dake, -mai は附属形式、終止・連体形2につく to, hodo, kiri などは附属語と考える。

仮定形と音便形とは、アクセントの上からは規則Iを満足していて活用形と認めるのに支障はない。しかし音の面を考慮するならば、やはり非独立の要素、附属形式と考えた方がよい。従って(19)の -ba や(22)(23)の -te, (-de), -ta, (-da), -tari, (-dari), -temo, (-demo)などは附属形式と考えられる。

北九州方言では、ナケバ、ヨメバなどの仮定形を使うことが若い人では少なく、仮定には、ナイタラ、ヨンダラ の形が使われる。一方で命令形が仮定形に取って代われつつあるので、以下のような状態である。

(7)

〈仮定形〉	ナ ^レ ケバ,	ヨ ^メ バ	〈命令形〉	ナ ^ケ ,	ヨ ^メ
	ワ ^ラ エバ,	オ ^ヨ ゲバ		ワ ^ラ エ,	オ ^ヨ ゲ
	キ ^レ バ,	デ ^レ バ		キ ^レ ,	デ ^レ
	ナ ^ラ ベ ^レ バ,	オ ^キ レバ		ナ ^ラ ベ ^レ ,	オ ^キ レ
<hr/>					
	ナイ ^タ ラ,	ヨ ^ン ダラ		ナ ^キ ー,	ヨ ^ミ ー
	ワ ^ラ ッ ^タ ラ,	オ ^ヨ イ ^ダ ラ		ワ ^ラ イ ^ー ,	オ ^ヨ ギ ^ー
	キ ^タ ラ,	デ ^タ ラ		キ ^リ ー,	デ ^リ ー
	ナ ^ラ ベ ^タ ラ,	オ ^キ タ ^ラ		ナ ^ラ ベ ^リ ー,	オ ^キ リ ^ー

このような方言では、仮定形と命令形を区別する必要はなく、両者ともに自立形式の /nake, ŋwara'e, kire, narabere/、/ŋjome, ŋojoge, de're, okire/ とし、また仮定のバは付属語 /ɔba/ とすることができる。

形容詞の活用形で規則Iを満足しないものは、連用形1、終止・連体形1、仮定形、音便形である。これらはやはり非独立の要素で付属形式と言うべきものである。これに続く -dake, -ba, -ta も付属形式と考えられる。ただし、連用形1と連用形2との違いはよくわからない。wa や mo はどちらにもついていようだから、両者の違いはあるいは世代差によるものなのかもしれない。

動詞・形容詞を通じて、規則Iを満足する、連用形2、終止・連体形2、命令形の三つは、自立形式であり、ある用言の異形態＝活用形と呼んでよい。また、これにつくものは付属語と認めてよい。

付属語はそれぞれ自分のアクセントを持っているが、規則II、IIIによって、「句」の中で自分のアクセントが実現したり消去されたりする。例えば(9)では、ナ^キワ(シナイ)、ワ^ライ^ワ、キ^ワ、ナ^ラベ^ワという一句の中に核が一つあるが、naki, warai, ki, narabe は無核動詞だから、この核は wa の持つ核が「句」の中で実現したものと考えられる。ヨ^ミワ、オ^ヨギ^ワ、デ^ワ、オ^キワでは、規則IIIに従って /ɔwa/ の核が消去されたと考える。

さきに付属形式であると言った -masu, -tai, -nagara などがアクセントを持つかどうかは難しい。(1), (2), (3), (4), (6), (9), (22) の -seru, (-saseru), -reru, (-rarehu), -nai, -tai, -nagara, -ba, -te, (-de), ta, (-da) などは、無核の用言につく時と有核の用言につく時とで、「句」のアクセントが異なっている。だからこれらには一定のアクセントはないと考えてよいだろう。一定のアクセントを持つのは、nakinagara, nakitai, yominagara, yomitai などの全体である。ところが、(5), (10), (11) の -masu, -mai, -dake は、無核の用言につく時も有核の用言につく時も、常に一定のアクセントを持つ。このことは、一見一定のアクセントを持つ付属形式の存在を許しているかのように見える。しかし、-masu や -mai, -dake は一定のアクセントを持つのではなくて、「句」のアクセントを決定する力を持つだけである。なぜなら、-masu, -mai, -dake の前に来る要素(付属形式)は常に無核に変えられていて、その意味で規則IIIの適応外にあるからである。

〈文献の引用に際しては、敬称を省略させていただきました〉

〈引用文献〉

- ① 秋永一校「アクセントから文法へ—品詞の弁別について—」(『国文学研究』16 昭和32年)
- ② ———『発音アクセント辞典』(日本放送協会 昭和41年)
- ③ ———『明解日本語アクセント辞典』第二版(三省堂 昭和56年)
- ④ 有坂秀世「アクセント型の本質について」(『国語音韻史の研究』昭和19年所載)
- ⑤ 上野善道「アクセント素の弁別的特徴」(『言語の科学』6 昭和50年)
- ⑥ 奥村三雄「辞の形態論的性格」(『国語国文』25-9 昭和31年)
- ⑦ ———『平曲譜本の研究』(桜楓社 昭和56年)
- ⑧ 川上 蓑「アクセント表記の零と無限大」(『国語国文』25-3 昭和31年)
- ⑨ ———「体言につく一拍助詞のアクセント」(『音声の研究』12 昭和41年)
- ⑩ 金田一春彦『四座講式の研究』(三省堂 昭和39年)
- ⑪ 日下部文夫「アクセントと文法」(月刊『文法』昭和44年11月号)
- ⑫ 阪倉篤義「日本語の活用」(『講座現代国語学』Ⅱ 昭和33年)
- ⑬ 佐久間鼎『日本音声学』(京文社 昭和4年)
- ⑭ 柴田 武「日本語のアクセント体系」(『国語学』21 昭和30年)
- ⑮ ———「アクセント論のために—金田一春彦氏に答える—」(『国語学』29 昭和32年)
- ⑯ 都竹通年雄「動詞の連用形とアクセント」(『国語アクセント論叢』昭和25年)
- ⑰ 時枝誠記『日本文法口語篇』(岩波書店 昭和25年)
- ⑱ 橋本進吉『国語法研究』(岩波書店 昭和23年)
- ⑲ ———『助詞・助動詞の研究』(岩波書店 昭和44年)
- ⑳ 服部四郎「附属語と附属形式」(『言語研究』15 昭和25年)
- ㉑ ———「アクセント素・音節構造・喉音音素」(『音声の研究』9 昭和36年)
- ㉒ ———「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」
(『言語の科学』7 昭和54年)
- ㉓ 早田輝洋「動詞・形容詞などの活用とアクセント」(『文研月報』15-4 昭和40年)
- ㉔ ———「東京方言の音韻化規則」(『言語研究』49 昭和41年)
- ㉕ 馬瀬良雄「新しいアクセント論と長野方言アクセントの体系」
(『長野県短期大学紀要』16 昭和37年)
- ㉖ 山田孝雄『日本口語法講義』(宝文館 大正11年)
- ㉗ 渡辺 実『国語構文論』(塙書房 昭和46年)

〈付 表〉

記述は『明解日本語アクセント辞典』第二版に従った。

形態音韻論的解釈を / / に入れて示す。単語の切れ目に・を入れる。

無核動詞 --- 泣く、笑う、着る、並べる
 有核動詞 --- 読む、泳ぐ、出る、起きる
 無核形容詞 --- 赤い、冷たい
 有核形容詞 --- 白い、短い

(9)

(A) 未然形

(1) セル (サセル)

/-----Oseru/ /-----Oseru/
ナカセル
ワラワセル
キサセル
ナラベサセル

/-----Osēru/ /-----Osēru/
ヨマセル
オヨガセル
デサセル
オキサセル

(2) レル (ラレル)

/-----Oreru/ /-----Oreru/
ナカレル
ワラワレル
キラレル
ナラベラレル

(3) ナイ

/---Ore'ru/ /---Ore'ru/
ヨマレル
オヨガレル
デラレル
オキラレル

/---Onā i/ /---Onā i/
ナカナイ
ワラワナイ
キナイ
ナラベナイ

/---Onā i/ /---Onā i/
ヨメナイ
オヨゴナイ
デナイ
オキナイ

(B) 連用形

(4) タイ

/---otā i/ /---otā i/
ナキタイ
ワライタイ
キタイ
ナラベタイ

/---otā i/ /---otā i/
ヨミタイ
オヨギタイ
デタイ
オキタイ

(5) マス

/---omā'su/ /---omā'su/
ナキマス
ワライマス
キマス
ナラベマス

/---omā'su/ /---omā'su/
ヨミマス
オヨギマス
デマス
オキマス

(6) ナガラ

/---onāyara/ /---onāyara/
ヨミナガラ
ワライナガラ
キナガラ
ナラベナガラ

/---onāyara/ /---onāyara/
ヨミデガラ
オヨギナガラ
デデガラ
オキナガラ

(7) ナ

/---onā/ /---onā/
ナキナ
ワライナ
キナ
ナラベナ

/---onā/ /---onā/
ヨミナ
オヨギナ
デナ
オキナ

(8) 中止法

/---o/ /---o/
ナキ
ワライ
キ
ナラベ

/---ō/ /---ō/
ヨミ
オヨギ
デ
オキ

(9) ワ (シナイ)

/---o'wa/ /---o'wa/
ナキワ
ワライワ (は1) オヨギワ
キワ
ナラベワ

/---ō'wa/ /---ō'wa/
ヨミワ
オヨギワ
デワ
オキワ

(C) 終止・連体形

(10) マイ

/---omā i/ /---omā i/
ナクマイ
ワラウマイ
キルマイ
ナラベルマイ

/---omā i/ /---omā i/
ヨムマイ
オヨクマイ
デルマイ
オキルマイ

(11) ダケ

/---odake/ /---odake/
ナクダケ
ワラウダケ
キルダケ
ナラベルダケ

/---odake/ /---odake/
ヨムダケ
オヨグダケ
デルダケ
オキルダケ

/---idake/ /---idake/
アカイダケ
ツメタイダケ

/---idake/ /---idake/
シロイダケ
ミジカイダケ

(12) 終止

/---o/ /---ō/
ナク
ワラウ
キル
ナラベル

/---ō/ /---ō/
ヨム
オヨク
デル
オキル

(13) ト

/---o-to/ /---ō-to/
ナクト
ワラウト
キルト
ナラベルト

/---ō-to/ /---ō-to/
ヨムト
オヨグト
デルト
オキルト

(14) ホド、キリ、シカ

/---o-hodo/ /---ō-hodo/
ナクホド
ワラウホド
キルホド
ナラベルホド

/---ō-hodo/ /---ō-hodo/
ヨムホド
オヨクホド
デルホド
オキルホド

/---i/ /---ō i/
アカイ
ツメタイ

/---ō i/ /---ō i/
シロイ
ミジカイ

/---i-to/ /---ō i-to/
アカイト
ツメタイト

/---ō i-to/ /---ō i-to/
シロイト
ミジカイト

/---i-hodo/ /---ō i-hodo/
アカイホド
ツメタイホド

/---ō i-hodo/ /---ō i-hodo/
シロイホド
ミジカイホド

(15) ネ、セ、ソ

/.....o.ne/ /...ōo.ne/

ナクネ ヨムネ
 ワラウネ オヨグネ
 キルネ テルネ
 ナラベルネ オキルネ

/.....i.ne/ /...ōi.ne/

アカイネ シロイネ
 ツメタイネ ミジカイネ

(16) マデ、ネー、ナー

/...o.māde/ /...ōo.māde/

ナクマデ ヨムマデ
 ワラウマデ オヨグマデ
 キルマデ テルマデ
 ナラベルマデ オキルマデ

/...i.māde/ /...ōi.māde/

アカイマデ シロイマデ
 ツメタイマデ ミジカイマデ

(17) カ、ナ(禁止)

/...o.ka/ /...ōo.ka/

ナクカ ヨムカ
 ワラウカ オヨグカ
 キルカ テルカ
 ナラベルカ オキルカ

/...i.ka/ /...ōi.ka/

アカイカ(注2) シロイカ
 ツメタイカ ミジカイカ

(18) カイ、カシラ

/...o.ka i/ /...ōo.ka i/

ナクカイ ヨムカイ
 ワラウカイ オヨグカイ
 キルカイ テルカイ
 ナラベルカイ オキルカイ

/...i.ka i/ /...ōi.ka i/

アカイカイ(注3) シロイカイ
 ツメタイカイ ミジカイカイ

(D) 仮定形

(19) バ

/...o.ba/ /...ōo.ba/

ナデバ ヨメバ
 ワラエバ オヨゲバ
 キレバ テレバ
 ナラベルバ オキレバ

/...o.kereba/ /...ōokereba/

アカケレバ シロケレバ
 ツメタイケレバ ミジカケレバ
 (ミジカケレバ)

(E) 命令形

(20) 命令

/...o/ /...ōo/

ナケ ヨメ
 ワラエ オヨゲ
 キロ テロ
 ナラベロ オキロ

(21) ヨ

/...o.jo/ /...ōo.jo/

ナケヨ ヨメヨ
 ワラエヨ オヨゲヨ
 キロヨ テロヨ
 ナラベロヨ オキロヨ

(F) 音便形

(22) テ(テ)、タ(タ)

/...ote/ /...ōote/

ナイテ ヨンテ
 ワラッテ オヨイテ
 キテ テテ
 ナラベテ オキテ

(23) タテ(タテ)、タリ(タリ)、テテ(テテ)

/...otara/ /...ōotara/

ナイタテ ヨンタテ
 ワラッタテ オヨイタテ
 キタテ テタテ
 ナラベタテ オキタテ

(24) カッタ

/...okatta/ /...ōokatta/

アカカッタ シロカッタ
 ツメタイカッタ ミジカカッタ
 (ミジカカッタ)

(注1) 明解日本語アクセント辞典には、ワライワ とあるが、ワライワだろう。

(注2) アカイカ となるべきところだが、イ音は喉を阻むことができないので、アカイカとなる。

(注3) アカイカイ となるべきところだが、注2に同じく、アカイカイとなる。

— 純真女子短大講師 —